

Sanriku-Asian Network Project

宮城・岩手の高校芸能部 インドネシア派遣事業

2018年3月23日～3月30日

インドネシア・バリ島



私たちは3月23日から30日の一週間、インドネシアのバリ島へ行き、鹿踊りを通した文化交流を行ってきました。その報告をしたいと思います。

スケジュール

	午前	午後	場所
23日（金）		自宅→宇都宮	宇都宮
24日（土）	宇都宮→成田空港	成田空港→デンパサール空港	バリ
25日（日）	オリエンテーション	バリ舞踊鑑賞	バリ
26日（月）	バロン・ダンス鑑賞	仮面博物館視察	バリ
27日（火）	国立芸術大学訪問	仮面舞踊を習うワークショップ	バリ
28日（水）	参加者間ミーティング	市内視察、ケチャ鑑賞	バリ
29日（木）	国立ウブド第一高校訪問	デンパサール空港へ移動	バリ
30日（金）	デンパサール空港→成田空港	成田空港→自宅	東京

こちらがスケジュールです。バリでの活動は5日間ほどでしたが、バリの芸能団体や現地の大学、公立高校などを訪れ、鹿踊りを披露してきました。

3月23日 金曜日

3月24日 土曜日

活動内容

1. 成田空港へ移動（新幹線＋高速バス）
2. 参加者と初顔合わせ
3. 成田空港で搭乗手続き＋出国審査
4. ガルーダ航空 GA881便でデンパサールへ

3月23日と24日は成田空港まで移動し、成田空港から飛行機でデンパサール空港へ向かいました。

～宇都宮で初めての合流～

3月23日

この写真は一緒に派遣する仲間と初めて合流して宇都宮で餃子を食べたときの写真です。自己紹介や学校の話をしてお互いを知ることができました。



3月24日 成田空港

初めての渡航。ドキドキの出国審査



この写真は空港の出発ロビーで撮りました。成田空港で太鼓などの荷物を預ける時は箱がサイズオーバーしていたりして大変でした。初めての出国審査、荷物検査は慎重な審査で通してもらえるかドキドキしました。

インドネシア・バリ島

人口：約300万人

宗教：ヒンドゥー教徒が多い

言語：インドネシア語

バリ語



バリ島はインドネシア共和国に属している愛媛県と同じくらいの大きさの島です。人口はおよそ300万人で、ヒンドゥー教徒が多くいる特殊な島で独自の文化や習慣を持っています。そして、このヒンドゥー教の儀式や儀礼に欠かせないのが、私たちが現地でみたバリ舞踊です。言語はインドネシア語のほか、日常的に「バリ語」が使用されています。

3月24日 土曜日
バリ島 到着

活動内容

1. デンパサル空港到着
2. 初めてのバリ料理
3. ホテルチェックイン

3月24日 デンパサル空港へ到着して、初めてバリ料理を食べました。

バリってこんなところ！



バリ島に到着して、飛行機を降りてからムワッと熱気を感じました。赤道が近いので、バリ島は本当に暑かったです。空港では沢山のタクシーの運転手が「タクシー安いよ」と日本語で観光客を出迎えていました。歩く場所がないくらいの運転手の量で、少し怖かったです。バリ人の人なつこさを感じました。バリ島は、イメージ通りの南の島でヤシの木が生い茂っていて、クラクションの音で騒がしい街でした。バリ島は私たちが住んだでる所と比べ物にならないくらい人の多い一大観光地でした。

インドネシア料理



デンパサールに着いてからは、ウブドヘタクシーで1時間半かけて行きました。私が初めて食べたインドネシア料理はサテとナシゴレンとストロベリーシェイクです。サテは日本でいう焼き鳥のようなお肉です。どの食べ物も日本人にも合う味で美味しかったです。

～ホテル～



ホテルは綺麗で過ごしやすかったですが、日本と違うなと思ったところは、部屋にヤモリがでること、そして日本みたいにカッチリしていない、マイペースなところです。部屋のシャワーが壊れていて、ベットメイクの時に直してもらったのですが、またすぐに壊れました。バリ人はとにかくマイペースでいつもニコニコしています。これが私たちの毎日の癒しでした。

3月25日 日曜日
バリ島 1日目

活動内容

1. オリエンテーション
 - a. 自己紹介+スケジュール確認+注意事項
 - b. インドネシア語講座
2. ガムラン楽団「スダマニ」訪問
 - a. 「スダマニ」の演舞
 - b. 鹿踊の披露
 - c. Q & A

3月25日 バリ島 1日目です。この日の主な活動は、ホテルでのオリエンテーションとガムラン楽団「スダマニ」の訪問です。

オリエンテーション

- 自己紹介
- スケジュール確認
- 注意事項
- インドネシア語講座



オリエンテーションでは、自己紹介をした後、スケジュール、プログラムについての注意事項などを確認しました。自己紹介では鹿踊りを始めたきっかけについて話しました。始めたきっかけは『初めて見た時にかっこいいと思ったから』という理由が一番多かったです。オリエンテーションの最後に行ったインドネシア語講座では、インドネシア語の挨拶、お礼の言葉などを学びました。

インドネシア語

おはよう = スラマツパギ

ありがとう = テレマカシ

美味しい = エナツ

頑張ろう = スマンガ

ちなみにインドネシア語で「おはよう」を「スラマツパギ」、「ありがとう」を「テレマカシ」、「美味しい」を「エナツ」、「頑張ろう」を「スマンガ」と言います。訪問先やレストランで使うと現地の人たちにとっても喜ばれ、会話の良いきっかけとなりました。

練習風景



一通りオリエンテーションが終わったあと、午後の訪問先、「スダマニ」での鹿踊りの披露に備え、炎天下の中、出入り、流れなど踊りの確認を行いました。

スダマニとは

バリを代表する世界的に
有名なガムラン楽団

「スダマニ」の4チーム

- ・ 大人チーム 1 チーム
- ・ 男の子チーム 2 チーム
- ・ 女の子チーム 1 チーム



スダマニとはバリを代表する世界的にも有名なガムラン楽団で、島内の他、海外での公演にも多数招かれています。スダマニは年齢や性別によって4チームに分かれており、大人チーム1チーム、男の子チーム2チーム、女の子チーム1チーム、の合計4チームがあります。この日私たちと交流したのは「男の子チーム」のみなさんです。

ガムラン

- 鍵盤銅打楽器
- 銅鑼（どら）
- 太鼓
- 縦笛

彼らが演奏するガムランとは、東南アジアのインドネシアなどで行われている、大中小の様々な銅鑼や鍵盤打楽器による合奏の民族音楽の総称で、楽器単体でもガムランと呼ばれるそうです。

主な楽器は、鍵盤銅打楽器、どら、太鼓、縦笛の四種類で構成されています。特に、鍵盤銅打楽器は独特な音がするのであまり日本で聞くことのない音だと思いました。



スダマニによる演舞



私たちが鹿踊りを披露する前に、スダマニの皆さんに演奏、踊りを披露してもらいました。初めに披露してもらったのがキジャンクンチャナという踊りです。日本語では、『黄金の鹿の踊り』と訳されます。次に披露してもらったのが『トペン』という踊りです。これはオープニングの映像でもご紹介した踊りです。仮面で顔を覆って舞踊劇を行うものを一般的にトペンと言い、仮面自体の事もトペンと言います。そして、最後は、バロンダンスです。装束をつけて踊るため、装束なしでのバロンダンスはなかなか見られないものだそうです。このバロンダンスについては後ほど詳しく説明します。

鹿踊り披露（水戸辺）



スダマニのみなさんが披露した後に、私たちも鹿踊りを披露しました。これは水戸辺の踊っている時の写真になります。

鹿踊り披露（岩谷堂）



これは岩谷堂高校のふたりが踊っている写真です。



鹿踊り披露（大東）



最後に大東高校の三人が踊りを締めくくりました。このように三団体それぞれが踊りを披露しました。

スダマニとの交流



- 互いの踊りの持つ意味
共通点：五穀豊穡
子孫繁栄
- 楽器、装束の説明
- Q&A

踊りの披露が終わった後にスダマニのみなさんとの、交流会が設けられました。いつも公演では踊って終わりなので、こうした交流会を通して自由に意見交換できるのは新鮮な感じがしました。この交流では主に三つについて意見を交わしました。踊りの持つ意味では話合いの中でバリ舞踊と鹿踊りとで、五穀豊穡、子孫繁栄という共通点があるということがわかりました。楽器、装束の説明では、スダマニのみなさんに楽器を鳴らしてもらいながら、楽器を丁寧に説明をしていただき、こちら装束の意味について説明し、頭の着付けも体験してもらいました。質疑応答では、こちらから一人一つずつ質問をし、スダマニの皆さんからも『鹿踊りを始めてどのくらいか』『声を発するのと太鼓を同時に叩くのは何かテクニックがいるのか』といった質問がありました。とても有意義で楽しい時間を過ごすことができました。

私が感じたこと

- 指導者のレベルが高い
- 細かい動きにまで意識が行き届いている。
- 純粋にガムランの演奏が好き。
踊ることが好き。

私はスダマニの皆さんとの交流を通して、3つのことを感じました。①指導者のレベルが技術的にも精神的にも高いこと、②細かい動きにまで意識がされていたこと、③演奏中に笑顔が溢れていたり、微笑みながらアイコンタクトで音を合わせようとしている姿から演奏することを心から楽しんでいるということです。



3月26日 月曜日
バリ島 2日目

活動内容

1. バリ舞踊「バロン・ダンス」鑑賞
 - a. デドさんによる「バロン講座」
 - b. デドさんのお宅訪問
2. マスクミュージアム（仮面博物館）の視察

3月26日 バリ島2日目です。この日は、午前中にバロンダンスを鑑賞し、午後はマスクミュージアム・仮面博物館を視察しました。

バロンドダンスとは

- 『ガムラン』の演奏に合わせた舞踊劇
- バロン、猿、美女、臣下、政治家、道化など多彩なキャラクター

バロン：良い魂 獅子の聖獣

戦いあう

ランダ：悪い魂 魔女の化け物



バリでは、悪い魂と良い魂が常に存在すると信じられている



二日目はバロンドダンスを鑑賞しました。バロンドダンスとはガムランの演奏に合わせ、善なるものを象徴する聖獣バロンと邪悪なものを象徴する魔女ランダの果てしのない戦いを描いた舞踊劇です。聖獣バロンと魔女ランダの他に猿、美女、臣下、政治家、道化など、多彩なキャラクターが登場します。バリでは良い魂と悪い魂がいつも存在していると信じられていて、バロンは獅子の姿をした聖獣で良い魂。反対に、ランダは魔女が変身したバケモノ、悪い魂とされています。

バロンダンスの役割

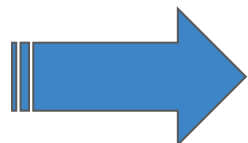
- 災いから守る為の儀式
- 現在でも神聖な儀式として寺院のお祭りなどで行われる
- 村おこしのための観光資源としてバロンダンス披露



バロンダンスは昔から災いから守るための儀式として行われており、現在も各村々で神聖な儀式として寺院のお祭りなどで行われています。ここでは観光客向けに踊りをわかりやすくアレンジし、村おこしのための観光資源としてバロンダンスを披露しているそうです。バリのこの取り組みをみて、私たちの鹿踊りももっと広く認知されるようになれば、バリ舞踊のように観光資源として町おこしの一端を担うことも十分可能なのではないかと考えました。

デドさんによる「バロン講座」

- バロン装束付け体験
- バロンの装束説明
- Q&A



デドさんの踊りに対する**熱意**が伺えた。

バロンダンス鑑賞後、ステージの裏にある本物のバロンを見せてもらい、装束の説明を受けました。また、実際にバロンの中に入ってバロンダンス体験もさせてもらいました。被って見るととても重く、70キロほどあるそうで、この重たいバロンを自在に操るデドさんは本当にすごいなと思いました。その後、デドさんに質問をさせてもらい、デドさんの踊りに対する熱い思いが分かりました。デドさんは虎の動きを常に考えており、同じ動きはしたくないため基本から派生させたアドリブの動きを取り入れているとおっしゃっていました。私はこの研究心、探究心を忘れない姿勢が世界的に有名なバロンダンスの踊り手と言われているゆえんなのだと理解しました。

デドさんのお宅訪問

バリの生活文化理解



- バリの家造りにおいて方角はとても重要
- バリの人々は神様、生と死を大切にしている

質疑応答の後、デドさんのお宅にお邪魔して、バリの文化について教えてもらいました。そこで学んだことの一例を紹介します。まず、バリではアグン山のある方角が神聖な方角とされていて、デドさんのお宅では北にあたります。家の中の北側に必ず家寺があり、そこにはお供え物がありました。反対に水まわりは不浄なものとされており、家の南側に作られるそうです。このことからバリの家造りにおいて方角はとても重要だということがわかりました。また、生と死、神様を大切にする文化があり、神に捧げる踊りとして伝統芸能もとても大切にされているそうです。この写真がそうですが、バリでは家でお産し、お供え物をする台の下に胎盤を埋める慣習があるなど、日本とは異なったバリの文化を学ぶことができました。

マスク・ミュージアム

インドネシアをはじめ

日本・アフリカ・マレーシア・

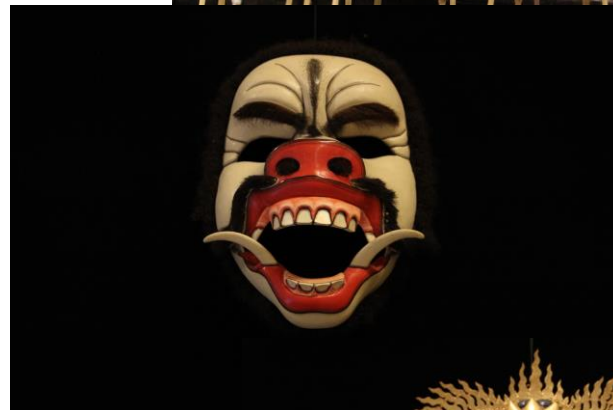
タイ・ミャンマー・カンボジア等

から収集された、

★ 約1060個あまりの仮面

★ 約3600体の操り人形が展示

午後からはマスクミュージアムという仮面博物館に行きました。ここには、インドネシアを始め、日本、アフリカ、マレーシア、タイ、ミャンマー、カンボジアなどから約1060個あまりの仮面と約3600体もの操り人形が展示されています。能面、人形浄瑠璃など日本のものもたくさんありました。



3月27日 火曜日

バリ島 3日目

活動内容

1. インドネシア国立芸術大学デンパサール校訪問
 - a. 水戸辺鹿子躍によるプレゼン
 - b. 鹿踊り披露
2. 仮面舞踊トペンの踊り手チョ・アリさんのスタジオ訪問
 - a. バリ芸能講座
 - b. トペンを習う

国立芸術大学デンパサール校

水戸辺鹿子躍のふたりによるプレゼンテーション！！



現地の大学生は熱心に話を聞いてくれた

ここでは、まず最初に、水戸辺鹿躍保存会のふたりが東日本大震災の後に感じた「震災後に鹿躍が果たした役割」についてプレゼンテーションを行いました。内容としては、東日本大震災の大津波によって多くの命が失われたのですが、奇跡的に太鼓が瓦礫の中から見つかったことから、『亡くなった人を想って踊れ』そんなメッセージを感じ、それから鹿躍に対する意識が変わり、亡くなった人のため、残された家族のため、踊らなければならないと思ったということです。インドネシアでも地震があり、学生さんにとっても身近に感じられる事だったのか、とても真剣に聞いていたのが印象的でした。

バリに来て2回目の鹿踊り

1回目よりリラックスしてできた！！

鹿になりきる！！



プレゼンの後は、バリ島にきて2回目の鹿踊披露です。1回目の演舞より皆リラックスしてできたと思います。1回目の踊りの反省点も活かすことができました。また、前日のデドさんの話で「動物になりきる」ということを教わったので、それを意識しながら披露しました。少し緊張はありましたが、水戸辺や岩谷堂の踊りを見て私達も負けずに頑張ろうと思いました。私たちの踊りを見てかっこいいと思い、記憶に残る踊りを見せようと努力しました。演舞後、大きな拍手を貰い、とても達成感がありました。

バリの大学生 × 鹿踊



学生さんはとてもフレンドリーで話しやすかったです。とても積極的で、鹿踊を知ろうとしてくれているのが伝わってきて、嬉しかったです。最初は言葉が通じないので上手く伝えられるか不安がありましたが、口唱歌と動きで太鼓や簡単な踊りを教えることができ、感動しました。言語が違って、太鼓や踊りであれば、共通でその感覚を掴むことが出来るので、芸能の力はすごいと改めて実感しました。

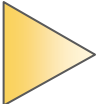
～大学生からの質問～

Q. 鹿踊は男性も女性も踊れるのか？

A. 基本は男性だけど、人が足りなくなったから女性も踊るようになった

Q. 装束の名前や意味は？

A. はかまのデザインはボタンガニ。ささらは、天と地をつなぐという意味



私たちは、質問に中々答えられず戸惑うことも多くあり、
まだまだ鹿踊についての知識が浅いと感じ反省した。

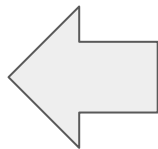
これは、大学生の皆さんからあった質問の例です。例えば、「インドネシアでは、ガムラン楽団は男性で組織されるが、鹿踊は男性も女性も踊れるのか」や、「装束に名前はあるのか、またその意味は？」などたくさんの質問がありました。たくさんの質問があり、私達の鹿踊に興味を持ってくれていると感じ嬉しかった反面、質問に対し中々答えられず戸惑うことも多くあり、まだまだ鹿踊についての知識が浅いと反省しました。

仮面舞踊ダンサー チョ・アリさんのスタジオ訪問



午後は、仮面舞踊の踊り手であるチョ・アリさんのお宅に訪問し、仮面舞踊、「トペン」を習いました。トペンとは、顔を仮面で覆い舞踊劇を行うバリ芸能です。キャラクターによって仮面をつけかえ、演じ分けています。

バリ芸能講座



仮面を彫っている所



チョ・アリさんは、この仮面を幼いころから見よう見まねで自分で作りはじめ、失敗や怪我などしながら仮面職人になりました。一つ一つ細かく丁寧に作っているからこそ踊りでもその繊細さが表現され魅力あるものに繋がっていくんだと感じました。私達は話を聞きながら、本当に踊りが好きなんだと感じました。幼少期から踊りを習っている人が多く、小さい頃から伝統に関わっているという点が日本とは違うなと思いました。様々なキャラクターを演じ分けており、豊かな表情、表現力は引き寄せられるものがありました。

トペンを習ってみて

姿勢や足の使い方が鹿踊に似ていた！！！！

目の動きが難しい
・・・。



私達は実際にチョ・アリさんからトペンの基本姿勢や表情の作り方などを教わり、一緒に踊ってみました。踊ってみて、普段使わない体の部分を動かすのですごく大変だった事と、私達の鹿踊はしし頭を被っているため表情は見えずに踊りだけに集中できますが、トペンは手や目の動きが細かく集中しなければいけないところが多くありとても大変だと感じました。姿勢を低くしたり、足をあげたりする動きは鹿踊りとスタイルが似ていて、驚きました。

3月28日 水曜日
バリ島 4日目

活動内容

1. ミーティング
 - a. これまでの活動の振り返り
 - b. 6月2日の帰国後報告会に向けて
2. 市内視察
3. ケチャ公演鑑賞

3月28日 バリ島4日目。午前中は振り返りの時間として、みんなで話し合い、午後はケチャの公演をみに市街地へ行きました。

ミーティング

共通点

- ・ 踊りの持つ意味
- ・ しし頭がある
- ・ 踊りの姿勢や足の動き
- ・ 教え方：教える人も一緒に踊りながら教える

バリ芸能と鹿踊の共通点や相違点などを話し合い、何を今後に活かしたいか意見を出し合いました。

相違点

- ・ バリ：一人で何役も演じる。表情が豊か。
手や目の細かい動きでストーリーを伝える。
- ・ 鹿踊：集団で同じ踊り。表情が見えない。
部活でやることが多い。

ミーティングでは、バリ舞踊と私たちの鹿踊りについて、共通点や相違点など気づいたことを話し合いました。飛行機で8時間も離れており、文化も言葉も違うのに、踊りには共通点がたくさんあり、驚きました。今後の活動については、鹿踊りを伝えていくためにどうすれば良いかなどを話し合い、私は、まず身近なところから部員を増やす努力をしたいなと思いました。

～ウブドの街～

バリの花

竹下通りみたい！

午後は街を散策しました。ここの通りは物の値段が決まってないので値段交渉をしながら購入しました。人が沢山で、東京の竹下通りみたいでした。頭にはバリの花を付けてもらいました。頭につけると良い知恵が授かるそうです。



バリ島で行われる舞踊劇

ケチャ“Kecak”



ケチャとは、インドネシアのバリ島で行われる男性合唱です。男性150人が上半身裸で燈台を囲むようにして座ると体を揺らしたり、ひざや背中を叩いたりしながら声を出します。猿を真似た叫び声の特徴です。日本では、「ケチャ」と呼ばれていますが、現地では「K」の音を発音しないので、「チャ」と言うそうです。楽器を一切使わず、「チャ・チャ・チャ」という声だけでリズムをとります。リズムには4種類のパターンがあります。最前列でみたので熱気とその迫力に圧倒されました。会場は、写真からわかるように超満員で、お客さんは全員観光客でした。

3月29日 木曜日
バリ島 5日目

活動内容

1. 国立ウブド第一高校 訪問

- a. 双方の高校より芸能・文化紹介プレゼンテーション
- b. 国立ウブド第一高校による「よさこい」と「ケチャ」の披露
- c. 鹿踊披露
- d. 交流

2. 寺院視察

3月29日、バリ島最終日です。この日はウブド高校を訪問した後、寺院に行きました。

～ウブド第一高校訪問～ (バリの高校生の発表)

お祭りみたい！



イスに着席してすぐにバリの高校生の歓迎ダンスとケチャが始まりました。日本のよさこいとバリ舞踊のコラボのような独特のダンスで「なるこ」を持って、はっぴ姿で踊っているのを見ていると日本にいるのかバリにいるのか分からなくなってきました。どの踊りも完成度が非常に高くて驚きました。後でわかったことですが、この学校は芸能に力を入れており、私たちと同じような「部活動」の時間で踊りを覚えるのだそうです。



あれ？

日本人？？？

日本語訳も自分たちで！？

スーパー高校生！！



その次はバリの高校生によるプレゼンテーションです。バリの高校生達は自分たちの学校について紹介してくれました。ここの学校は曜日ごとに制服が違っており、全部で5種類あるそうです。このプレゼンテーション、なんと英語と日本語のバイリンガルでした。日本語も選択クラスで勉強しており、とても流暢で、将来は、きっとこの高校生たちが外国語スキルを活かしてバリの観光を担っていくんだろうなと思いました。小さい島ですが、観光の島としての一面が学校でも感じられました。

～私たちの発表～



私たちも事前に準備していたプレゼンテーションと鹿踊の発表をしました。プレゼンテーションでは、私たちの学校や鹿踊部について、家族についてを話しました。バリの高校生たちが私たちの話を真剣に聞いてくれているのが嬉しかったです。交流の最後には、太鼓としし頭の着付けも現地の高校生に体験してもらいました。みんなとても嬉しそうでした。

～交流タイム～

1. サトウ

2. ドウア

3. ティガ



バリの高校生に太鼓をつけて私達の地域に伝わる伝統芸能、鹿踊を教えました。使う言語は違っても伝統芸能を通して繋がりがあえた気がしました。普段、何気なく部活で踊っている鹿踊りが、バリでこんなにも興味を持ってもらえたこと、本当に感動して、また鹿踊りを誇りに思いました。最後は、サトウ、ドウア、ティガで写真をたくさん撮り合いました。

Gunung kawi sebatsu寺院



落ちちゃった！



高校の後は寺院に行ってきました。寺院に入るときは正装をしなくてはいけません。そして血は不浄な物とされているので怪我などしている人は入れませんでした。寺院で私達は反省と夢をお祈りしてきました。頭から聖水をかけてもらいお清めもしました。そんな事をしている間にスリとスカートに挟んでいた私のスマホはこの聖水の中に落ちてしまいました。その瞬間がこの写真です。スマホも清められたみたいで奇跡的に故障することなくスマホは無事でした。そして、珍しいことに私達は210日に1度のお祭り、「オダラン」にも出会うことができました。日頃の行いが良いのか、儀式としてのバリの芸能も見ることができました。

オダランって何???

みんな同じ白い服装で頭にはちまき。



この写真はオダランの様子です。オダランとはバリ島で日常的に利用される210日を1年とするウク歴に基づいて、家寺から村の寺へ村人総出でお参りするお祭りです。普段はひっそりとしているバリのお寺も、この日は綺麗に飾り付けられ、朝から地元の人々が参拝に訪れます。夜になればバリ舞踊やガムランなどの伝統演芸が奉納され華やかで賑やかな日となります。

3月30日 金曜日

活動内容

1. ガルーダ航空 GA880便で成田空港へ
2. 自宅へ（成田エクスプレス＋新幹線）

3月30日、成田空港に向けて出発しました。

～涙の帰国～

お世話になった
通訳さん、
ドライバーさんと
お別れ。



バリ人の生活ぶりや文化について知ることを感じることができた濃い5日間となりました。バリの人々にとって神様はとても近い存在で、いろいろな儀式が生活の中に溶け込んでいました。私たち日本人は常に神を想う事はないですが、それと同じくらい今の生活に感謝して生活していきたいなと思いました。

まとめ ～鹿子躍でつながる世界～

学生派遣団のバリ島での経験

○異文化を感じる

- 生活、食べ物、気候、言語、宗教、
伝統文化、郷土芸能

○自文化を発信する

- 郷土芸能(鹿踊、鹿子躍)
- 日本の生活、東日本大震災

○共通の“郷土芸能”を通じた交流

- ディスカッション
- 装束の着付け体験、踊り、ダンス、太鼓の体験

共通



親近感



興味

交流プログラムの目的

バリの文化
を知る

東北の芸能
を伝える

参加者間の
ネットワー
クを作る



言語ではなく“体験”で ところを通わせる



○鹿踊装束の着付け・太鼓の体験

▷ 装束の意味

▷ 太鼓の音 ... 「タンタタコモコ」



「実際に体験」

→ お互いに通じ合うものや、感じるものが生まれた。

/ 音 / リズム / 動き / バチの当て方 / 想像 / 興味 / 触れる / 笑顔

「同じようにできた！」

現地での鹿子躍の演目披露の後にはほぼ必ず鹿子頭をかぶったり・太鼓を叩かせたり、体験の時間を設けてみた。実際に装束に触れてもらうことで、「背中の長いものは何？」と質問があったり、「この模様は伊達というお殿様のマーク」など説明ができ、躍りの意味から地域の歴史や特色に自然に興味を持ってもらえることができた。言葉が通じずとも、重さ、材質、音、動きなど五感で体感してもらえたので、観るのとはまた違った感覚を持てる。→「自分の中にシシオドリをつくる、取り込む」

「口唄歌 タンタタタコモコタンタン」その通りに叩いてもらったり、こちらの真似をしてもらうことで、言葉を使わずに音や動きだけで理解し合えた。個人的には「平和で幸せな時間」、みんなが笑顔になるような時間だと感じた。言語ではなく芸能で、コミュニケーションしてみるものの意味や価値を実感できた。

海外の人々に向けて 発信するために ...バリの芸能

意外とわかりやすい



- ◆世界中からの多くの観光客を引き付ける魅力
- ◆現代に合わせて構成や形をアレンジ。
 - 本来の芸能の形がもっていたポテンシャルを引き出した。

バリの芸能を見てみると、「バロンダンス」は、ガムラン演奏に合わせた舞踊劇。演劇のようなもの。

右の「バロン」は中に人が2人。日本の獅子舞のようだと感じた。動きは動物のようで、本当に繊細な動き。単体では、何を表現して踊っているかはよくわからない。鹿子踊も同じかもしれない。

でも、この「バロンダンス」の別のシーンでは、本当に演劇のようで、バロンの他にいろんな人が出てくる。王様、猿、魔女、悪魔・・・左の写真は、包丁で「ぐさぐさ」しているところ。海外の人間が見ても、とてわかりやすい表現。しかも迫力があって飽きない。

→大昔から続く「伝統芸能」 っぽくない 新しい感じ。

→観光客向けにアレンジしたことで、多くの人を惹きつけているのでは。

現地での鹿踊披露

3 団体が 本来の形ではない 特別構成で演舞。



大東高校



水戸辺鹿子躍



岩谷堂高校

飛行機の荷物の関係や、派遣人数の関係で、本来の形ではない構成にせざるを得なかったというものもあるが①8人で踊るもの→2人～3人、②さが短い、③装束なし、④5分ずつなどアレンジして披露。→普段は交わることのない鹿踊3団体の動きが、1つにまとまるように演目を調整。踊り終わっての交流の時に知ったが、バリには日本の「供養」の概念がない。鹿踊が本来もつ「供養のための踊り」という表現を伝えるのが難しかった。40分しっかり踊っても、何をやっているかわからなかったと思う。今回は、構成が変わっても、「日本の鹿子踊を知ってもらう」入り口として、太鼓を叩き、跳んで、歌って躍る「こんな芸能があることを知ってもらう、興味をもってもらう」ことを目的にして躍った。

「シシオドリ」と「シシマイ」のコラボ



2018.5

東京鹿踊 西向天神社奉納 & ワークショップ

写真：鹿写真家 石井陽子さま

海外の人ばかり、普段郷土芸能になじみのない人たちに「知ってもらふ」ことを目的とした活動の例で...参考までにこちら。
先月の東京鹿踊という団体の活動例。東京にて 鹿踊と獅子舞の違いを知ってもらふために、2つ並べて比較するというワークショップを行った。
イレギュラーで鹿子踊の演目中に獅子舞が入ってくるっていうコラボ演舞もやった。このような取り組みは、古い伝統を守り継ぐという意味ではよく思われないことかもしれないが、「本来の形がある」ことはもちろん伝える。あくまでも「それを知ってもらふ」ためのきっかけとすることが前提なら、特に海外の人に見せる時には、時には形を変えて見やすくする、関わりやすくするという必要かもしれないと考える。

観て、触れる機会を地域の中に。

もっと気軽に



行山流水戸辺鹿子躍の墓踊り
(南三陸virtual museumページより)

- ▶□「かたい」、「関わりづらい感じ」
- ▶東北に行けば、凄い「シシオドリ」が観られる場所づくり、態勢づくり、"魅せる"
- ▶震災10年以降の三陸沿岸の復興創生、観光客誘致に郷土芸能を

来たる TOKYO2020のチャンスをどのように活かせるか！

自分の地元、東北地域、地域内やあるいは海外に向けて...これからシシオドリをどう活かせるか。

○これまで...一般の人が関わり難い郷土芸能だったように思う。(特定の人が踊るもの。なんとなくお祭りで披露しているところを目にした。よくわからないけどかっこいい。迫力がある。意外と地元の人が鹿子躍の意味や歴史を知らない。なおさら外部の人もそう。

演目を解説なしに観ただけでは意味もわからない。)

○鹿子躍等多くの郷土芸能の中には、「地域を知る・魅力を伝える」要素がある。→装束や躍り、唄を紐解くと、その地域の歴史(想像ができる)や特色を感じることができる。

○東北に行けば、凄い「シシオドリ」が観られるらしいぞ！と色んな人に思ってもらうために。まずは「そのための態勢づくり」が必要。すでに首都圏中心で実践している団体もいるが、「東北に鹿子躍がある」ことをしてもらおうための工夫。見せ方を変えてみる。見やすくする。あるいは、時には団体がコラボするようなパターン... すごい！と思わせる見せ方も時には必要か。そして「場所」。例えば、三陸にバリのように大きな野外ステージを作ってみる。「寺院」「森」「里山風景」などを活かす。本来の鹿踊が持つ意味合いに沿った、公演環境を擬似的再現する。ことが大事。沿岸部のこれからの復興創生と、観光客誘致にぜひ地元の郷土芸能が持つポテンシャルを発揮させたい。世界の人から見ても、「すごい」と思ってもらえる力を持っていることをバリで実感。もっともっとその力を発信すべきなのは。

→来たる二年後の東京2020。世界の人々が日本に集うチャンスに私たち若い郷土芸能継承者が、鹿子躍をそこにどのように活かせるか。その様々な可能性を、様々な人の協力を得ながら、考えてみたい。

ご静聴ありがとうございました

